

山本周五郎・作 「泥棒と若殿」より抜粋

——切炉へ踏みこんだな。

成信はこう思っついにやにやした。うろたえた相手の顔が見えるようである。へまな人間をよこしたものだど、苦笑いをもらしたとき、そっちでぶつぶつ呟やくのが聞えた。

「おう痛え、擦り剥いちまった、ちきしょう、なんてえ家だ、どこもかしこもぎしぎし鳴りあがって、こんな陥し穴みてえなものまで有りあがって、——へっ、おまけにすっからかんで、どこになにがあるかわかりあしねえ、ちきしょう、まるで化物屋敷だ」

擦り剥いたところを縛るのだろう。手拭かなにか裂く音がした。こんどは人がいないものと思じたか、独りでできりにぐちや不平をこぼしながら、暫らくそこらをこそこそやっていた。それからやがて襖をあけ、この寢所へとはいって来た。

ずんぐりと小柄の男だった。短かい半纏のようなものを着て、股引をはき、素足で、頬か

ぶりをしていた。もちろん武士ではないし、刺客などというものとも類の違う人間だ。

——とするとこれは、ことによると盗人というやつかもしれない。

そう思うと可笑くなって、成信はついにくすくす笑いだした。相手はぎよっとしたらしい。こっちへふり返り、眼をすばめて、そこに敷いてある夜具を眺め、その中に人間の寝ているのを見た。それからとつぜん「ひょう」というような奇声をあげてとびのいた。

「だ、誰だ、——なんだ」

男はこう叫びながら、及び腰になってこちらを覗いた。成信は黙っていた、仰向けに寝たまま身動きもしない、——男は迷って、逃げようかどうしようかと考え、そのあげくやっと決心したのだろう、やおら片手の出刃庖丁を持ちなおし、それを前方へつき出してどなった。

「やい起きろ、金を出せ、起きて来い野郎」

「——」

「金を出せてんだ、おとなしく有り金を出しあよし四の五のぬかすと唯あおかねえ、どて

っ腹へこいつをおんめえ申すぞ」

成信はやっぱり黙っていた。男はじつとようすをうかがい、ひと足そろっと前へ出た。

「ふてえ野郎だ、狸ねえりなんぞしやあがつて、それとも何か計略でも考げえてやがるのか、へっ、こっちあな、表に三十人から待ってるんだぞ、ぴいとひとつ呼笛を吹きあよ、へっ、命知らずの野郎どもがだんびら物をひからしてとびこんで来るんだ、じたばたすると命あねえぞ」

「——面白いな、ひとつそれを吹いてみる」

「なによう、な、なんだと野郎」

「——その呼笛を吹いてみると云うんだ」

含み笑いをしながら成信がそう云うと、男はうっと詰り、それから出刃庖丁をゆらゆらさせ、精いっぱい凄んで喚きたてた。

「ふざけるな、しやらくせえや、なにようぬかす。笑あせるな野郎、ちきしょうめ、——や

い、なんでもいいから金を出せ」

「——気の毒だが金はない」

「てめえおれを素人だと思ってるのか、これだけの大屋敷で金がねえ、へっ、金はないってやがる、ばかにするなってんだ、やい起きろ、こっちあちゃんとめどをつけて来たんだ、四の五のぬかすと家捜しをするぞ」

「それはいい思いつきだ、遠慮はいらないからすぐやってみろ」

成信はさらに、こうつけ加えた。

「捜してみてもしも有ったらおれにも少し分けて呉れ」

「ふざけたことを云いやがる、しゃらくせえや、ばかにしやあがるな、野郎、みていろ、そこを動くと命あねえぞ」

こう脅迫して、こちらがじっとしているのを認め、そろそろ家捜しにとりかかった。しかしそれはそう安楽にはゆかなかった。襖はすぐ倒れるし、戸棚の戸はあけるなりおっこちた。

がらがらとなにかが倒れ、「痛え」という声がしたと思つと、またどこかを踏みぬいたとみえ、板のへし折れるはげしい音が聞えた。

「ええいめえましい、こんちきしょう、なんてえ家だ、なんてひでえ家だ」  
じつ云ったとたん、男はばりばりすんとどどにかへ落ちこんだ。

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。